

「証者の言葉 知恵の言葉」

ルカ 21 : 12~15 使徒 5 : 17~33, 34 ~ 40

■ 人間の領域を超えた神の働き

一人の人に染み付いた考え方は取ることが本当に大変なことです。生きている社会の知識、今まで見てきたものというものが私達の見方を小さく狭め制限していつてしまうのです。ところが、使徒の働き、ルカの福音書の著者であり医者であるルカが描写しているすべてのストーリーで言えることは人間の領域を超えた神の働きです。ルカはそれを医学的に論理的に説明しようとしているのです。

弟子達は元漁師であったりして特に学びをした人々ではありませんでした。そんな弟子たちがパリサイ人達の前で証言をしています。今の裁判を考えてもわかりませんが、証言者は必ず証言に偽りがなく、偽りであるならば罰を受けてもかまわないということを宣言をします。証言をするということは罰を受ける可能性があるということです。「証言」の言語を見ると「命がけ」です。ですから、弟子たちがパリサイ人の前でしている証言というものが命がけなのだということがわかります。おまけにこの裁判は弟子たちを殺すためにパリサイ人達が偽りの証言者をたてて弟子たちに証言をさせるという弟子達にとっては非常に不利な偽りの裁判でした。ですが、弟子たちの証言があまりにも論理的でできすぎているのでパリサイ人達は答えることができません。イエス・キリストは弟子たちに前もって証言の準備しないように伝えておられます。このことを通してわかることは、神様がその瞬間に語りたことを弟子たちを通して語らせたということです。そしてパリサイ人がどういう反応をするかということも神様は知っておられたということです。

■ 私達は守られている

弟子達がしてもいない罪で告発された時のように、理不尽を感じる時、心が騒ぐ時…私達は神様に守られているということを知らなくてはなりません。「シティ・オブ・エンジェル」という映画があります。天使が人間の女性に恋をするというラブ・ストーリーなのですが、ラブ・ストーリーは別としてこのストーリーの中には大切なテーマがあります。「私は信じない。」という女性の言葉に対して「信じるのができなくても、真実なんだ。」という天使の言葉、つまり、私達が信じるか信じないかは関係なく真実は真実であるということがテーマです。私達が聖霊様や御使いの存在が信じられようが信じられまいが神様はこの存在が真実としてであると伝えているのです。

■ 肉の思いに生きるな

(使徒 5 : 1-11 / ローマ 8:5-10)

肉に従う道と御霊に従う道のどちらを選びますか？聖書は昔から「霊・魂（知識・意思・感情）・肉」を整えることを伝えていきます。ダビデも神様の言葉に従って自分の魂を管理しようとしていました。私達も肉の思いに生きない道を選ばなければいけません。正しい道を選べるように聖霊様はあなたの内に住んでくださっています。心に訴えかけ、良心に正しい決断を促し、それも聞けないくらい良心が消え去って感情的なものが高ぶっている時も聖霊様は働かれながら、御使いは私達に近づいて涙を拭い、慰めようとしています。私達が一人だと思った時も、人に裏切られた時も、絶望の淵にいる時も、大失敗して自分の人生が壊れてしまった時も…正しい答えを与えて道を誤らないように正しい決断ができるように働いているのです。いつも共にいて「平安であれ。私の語る言葉を聞きなさい。」と語って下さっているのです。これを聞けるか聞けないかが「知識」で生きる人と「知恵」で生きる人との違いです。知識で生きると本当の真実が目の前にあらわれても受け入れられません。その証拠に知識人であったパリサイ人や律法学者達は目の前に真実（キリスト）があらわれたのに十字架にかけて殺しました。

■ ガマリエルから学ぶ人生の知恵

律法学者でありパリサイ人であったガマリエルは自分の同胞たちが感情的になって間違ったことをしようとしている時に冷静に客観的に情報を提供しました。そしてその伝え方は否定ではなく同胞が正しい決断をできるように促すものでした。これが客観的目線（神の視点）です。私達は問題が起こると当事者として非常に狭い側面で物事を見てしまいます。傷つけられた、あの人にこう言われた、私は被害者だ…と覚えてしまいます。そして私達の客観性は現在の客観性しかありません。しかし、神の客観性ははじめてあり終わりなのです。過去と将来がそこにあるのです。つまり、過去に神様の知恵というファンデーションを塗られるので将来が生まれるのです。ですから、「今」だけを見てあきらめるという決断はありません。ステパノが石打ちで殺された時の首謀者はサウロ（後のパウロ）でした。サウロの師はガマリエルであったのに師のようになっていませんでした。どれだけ素晴らしい師の元で知識を学んでもサウロはサウロでしかなかったのです。ところが、その知識を学んだサウロはキリストに出会った後に、学んだ知識（過去）の上に神の知恵を得ました。そしてパウロに変わりました。パウロに変わった彼はガマリエルのように正しく語る人に変えられていくのです。

■ まとめ

- ①客観的に自分を見て自分をコントロールしてください。聖霊様に聞いて助けがあることを知ってください。私達は本来神様と一緒にいたいはずですが、ところが、事件が起きると神様を離れて悪魔の方へ行こうとします。そんな時に聖霊様は「そっちではない。こっちだ。」と語り、その声を聞けるように御使いも助けてくれるのです。そこで私達は選ぶことができるのです。「そっちに行くな！」と自分の魂（知識・意思・感情）に言い聞かせることができ、魂の管理者となれるのです。ですから、今日決断しなければなりません。その決断を脅かすのが悪魔であり、その決断を助けるのが聖霊様です。「聖霊様。今私は自分では決断ができません。この出来事をあなたの目線で客観的に見させてください。」と祈る時、驚のように翼をかってのぼっていきけるようになります。そこで神様の「前に進め」「戻れ」「とどまれ」と言われる声を聞くことができます。
- ②問題の解決をしようとする時、相手に向き合う時に当然厳しさが必要です。しかし、聖霊様と共に相手に決断を促してください。これは甘やかせと言っているわけではありません。いつもガマリエルのような方法でやるように言っているのではありません。いつもやり方は違います。人によって接し方は違います。しかし、否定で相手を排除するのではなくて相手が正しい決断ができるように向き合ってください。

■ 祈りましょう

苦しみにあったことは私にとって幸せでした。すべての災いと試練はその時は私を苦しめ、痛めつけるものです。人生を無にし、台なしにするような出来事、自信を失わせ将来と希望を取り去るような出来事かもしれません。しかし、喜んで受け取ります。あなたはステパノの事件を通してサウロを、また多くの人々を作り変えていったからです。そして、散らされた人々によって地の果てまで福音が伝えられ多くの人々が救われキリストの証人とされ、私自身もその一人とされたからです。ステパノの正しい声を聞けなかったパリサイ人や律法学者達の間違った理不尽な行動さえも神様の計画を推し進めたからです。主よ。困難と理不尽の只中にある時にこそステパノのようにあなたを見させてください。私はあなたを見つめます。

(要約者:全本みどり)

(2020年6月14日)